

槐 かい

岡井省二創刊

平成23年2月号

平成二十三年二月一日発行 第二十一巻第二号 通巻第三六号（毎月一回一日発行）
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



流れ星

高橋将夫

鬼の子の糸一本に不安なし
触れ合うてやがて一つに鱗雲
葉の先に生れし露のこぼれたる
秋草の秘めし色香も三千院

ぶらぶらもせかせかもゐて大花野
散り時は己が決める銀杏かな
山河の寢息と思ふ地虫鳴く
秋風にシンクロナイズする心
繕ひは無用なりけり破芭蕉
一列に雁をつなげるものは何
流れ星すべてそこから始まりし

槐安集

水野恒彦

急がねば吾消え入らむ萱野原
雁わたりたる光年の夜空あり
ほのぼのと縦に割れたる通草かな
立冬の大河を渡る旅ならむ
枕ことばに紺が匂ふよ初時雨

延広禎一

枝打つて楽酒楽菜楽寿かな
正倉院爆涼螺鈿琵琶五弦
裸婦像の爪先にある秋思かな
衣被酒呑ちちの考の呵々大笑
遊戯祝一國并省の禮儀上袴の旅宇宙の声よ省二フ忌



加藤みき

棗の香にふくらんでゐる紙袋
白粥の水晶の光冬の空
田の株のそれぞれにある冬の顔
冬の雨玉砂利耽と光りたる
寒月やひたひたひたと来るもの

石脇みはる

振りあげし拳はどこに花八ツ手
霜月や田に残されし丸太棒
大川に水烟たつ近松忌
山荘の冬に入りたり甘雨あり
臘八や黄曼陀羅華満開に

中島陽華

馬油屋はこのつきあたり夕紅葉
ははそ散る子ともろともにまろびけり
変り目や大白鳥の風蓮湖
神鏡に影うつりけり七五三
ひとり寝の枕の高さ寝積いねんで

竹内悦子

芙蓉の実雀来てをる六地藏
分け入れば秋山に魔羅大明神
秋桜や太平洋と日本海
綿吹くやポップコーンの紙袋
金木犀銀木犀の呪文かな

栗栖惠通子

望郷の果てはありけり鯛雲
白粥に踊るかつぶし翁の忌
はやぶさの微粒子受けて冬帽子
パドックのとほき嘶きクリスマス
雪女郎背に爪あとの残りをり

大島翠木

仏に火神には水を秋天下
敗蓮田騙されてみやうかな
冬に入るはねては見する鯉の紅
神鶏の関いくたびも白秋忌
母じやとも鶴とも樋口一葉忌

雨村敏子

八萬経堂色なき風の吹き渡る
揺れてゐるもの一葉と枯蠟螂
鬼灯の枯れて緋色を深めたる
山よりの種ぐさのこゑ団栗と
みち潮や八朔からくれなゐ梅の夜となりぬ

小形さとる

三才はすこぶる寧し菊の酒
花野路をさつさと帰る人ばかり
秋寂びぬテトラポッドの腿も
冬至雲君手短にものを云へ
轡虫一沫の悲もなかりけり

本多俊子

秋蝶やその墓の文人を思ふ
法の山海になだるる霧すだま
大松の奥床しさも初時雨
小六月一度触れたき犀の角
天狼や老の美学のありにける

久津見風牛

ペコポコと耳の鼓や秋の風
愛憎の半ばをすぎて冬の旅
山くぢらかたへに白湯たぎらせて
かはたれの白き腕や烏瓜
砂利音の踵にはねる七五三

近藤 きくえ

落葉掃く僧にあらたな風生まる
冴えわたる紺紙金泥経拜す
茶の花や仏徳山の晴れ渡る
朱の橋を渡り大杉底冷えす
木洩れ日に彩なす落葉しぐれかな

近藤 喜子

帯解や首のぼしみる鳥骨鶏
わたくしも通り過ぐもの夕時雨
全身を耳にしてゐる海鼠かな
蒼宵に音のみ込まれたる鷹野
裏返す火の静かなる落葉かな

谷村 幸子

三輪山の日だまりに熟れ青木の実
秋ぐみや額になつかし父の文字
玉蜀黍並んで食べて飛鳥かな
白壁に影ゆれてをる破芭蕉
熊笹に葉づれありけり赤蜻蛉

瀬川 公馨

吉祥の供物なりけり茸山
若冲の菜蟲譜ゆると開きたる
再会の衣被なり朱雀門
山茶花と白羊宮に遊びたる
鍵袋釣瓶落しを呪ひたる

久保東海司

木の実落つ闇の深さを測るごと
陶狸笠の緒締めて寒に耐ふ
雪濡れのたてがみを梳く調教師
取り敢へず端歩を突いてふところ手
紅葉且つ散り込む谿のくらさかな

松原仲子

風に乗り夢の中まで紅葉して
ひろやかに寒鴉あそびし夜明けかな
寒紅や歯をもて筆をなだめける
冬の鴟空うるうるとしてゐたり
ちりぢりに声の明かるき闇夜汁



槐市集

井上静子

冬暖か男料理の眩しかり
魯田を鷺の羽ばたく風なりし
遠き日の校歌優しき運動会
別嬪と呼ぼるる媼冬紅葉
墨の香の匂うてゐたる月今宵

岩下芳子

茶の花の仰向いて咲く己がじし
敗荷となるもすつくと立ちにけり
ぐいつと引く団栗眼達磨の忌
白々と冬月残る神の山
一二一二落葉踏みゆくアンダンテ

岩月優美子

ユトリ口の歩み来し道冬木立
黒鳥のこゑ夕闇を破りたる
ひらめきは銀杏落葉の中にな
永くとも短かき人生^よ牡丹焚く
冬ざれや巖も波も切り立てり

宇田喜美栄

柿すだれ甘くなる風吹いて来い
楽しみは通院帰りの栗拾ひ
木曾駒のゆくを見送る花野より
通り過ぐ湖畔に添ふて秋灯
鬼の子にあしたの天気聞いてをる



槐集

高橋将夫選

蔦枯れてより束縛のはじまりぬ
庭師来て寒さを残し帰りけり
霧の中より山越え阿弥陀のごときじル
枚方 熊川 暁子

露天湯の底までもみぢ明りかな
秋愁や反る一枚のオブライト
飛び込みし木星胸に虫すだく
虫の闇ブラックホールは身の内に

月更けて貴船にいそぐ影一つ
立冬や見失ひたるけもの道
子別れか反哺の孝か啼く鳥
結界をすり抜け冬に入りにつける

焚火かなけものはとほく輪をつくり
東京 西村 純太

凧も過ぎ去るものひとつなる
狐火を追うて入りける人の闇
人間の言葉を忘れ狩の夜
夜興引や夜の目方を嗅いでをり

さもありぬかくもありぬと海鼠食む
一本に大地を見たる鷹一羽
鱻の目を借りて快樂けらくを見てゐたる
亥の子石搗いて地軸に活を入れ
冬霧に透ける灯台明かりかな
一本に大地を見たる鷹一羽
喜屋川 前田美恵子

熊撃の名人隙ある背かな
曖昧に生きた証の暦果つ
初殻に煙立ちたり神の留守
散り敷ける落葉踏みゆく黒ブーツ

この奥はまたぎも知らぬ水引草
日向ぼこ笑ひころげて死の話
銀杏散る庁舎の前の花時計

幻影は敵か味方か大花野

枚方 富松 寛子

守口 柳川 晋

松下八重美

銀河往来 高橋将夫

◇「槐集」観照

鶯枯れてより束縛のはじまりぬ 熊川 暁子

鶯が枯れて、何かに絡み付いている様子があからさまになった状態。鶯が枯れて初めて、その絡みつく状況を束縛と作者は実感したのだ。茂った鶯の葉の下に隠れていた実態が詠まれている。

〈庭師来て寒さを残し帰りけり 暁子〉

〈露天湯の底までもみぢ明りかな 〃〉

〈秋秋や反る一枚のオブラート 〃〉

〈月更けて貴船へいそぐ影一つ 〃〉

いずれも景は簡明ながら、それぞれ作者独自の視点があり、しかも、こと・ものの本質に迫るものを内包している。

狐火を追うて入りける人の闇 西村 純太

狐火を追って行ったら人の世の闇に入ったという。狐火を追えば、人の世の闇を抜けるかと思ったら、なんのことはない、行き着いたところは人の世の闇だったという。この「人の闇」実は自分の身の内なのかもしれない。

〈焚火かなけものほとほく輪をつくり 純太〉

焚火を遠巻きにする獣を知ってか知らずか、その中心で焚火にあたっている自分の姿が脳裡に浮かび、ゾクツとした。

一本に大地を見たる鷹一羽 前田美恵子

大地を鳥瞰している一羽の鷹。その鷹が飛びながら見た地上

の景を一本の道、一本の大地とみた作者の感性に共鳴。

〈曖昧に生きた証の暦果つ 美恵子〉

〈幻影は敵か味方か大花野 〃〉

いずれも、意味深長で考えさせられる作品。

霧の中より山越え阿弥陀のごときビル 富松 寛子

山越え阿弥陀の来迎図には山の上に阿弥陀如来が大きく描かれている。霧の中にのっと現れたビルから山越え阿弥陀を連想する作者の想像力に脱帽。

結界をすり抜け冬に入りける 柳川 晋

結界の外は冬だという。結界は季節までも締め出すらしい。それにしても、わざわざ冬の中に出て行かなくてもいいのにと思うのだが。

日向ぼこ笑ひころげて死の話 松下八重美

死といえば深刻な話だが、まるで自分には無縁のように話すこともある。親しい友人と日向ぼこをしながらの談笑の場面である。なんともおらかな風景である。

〈散り敷ける落葉踏みゆく黒ブーツ 八重美〉

黒ブーツの女性の姿があれこれ想像できて面白い。

柿灯る家あり田あり畑あり 中野 京子

家の庭に柿が生っている景を「柿灯る家」と描写している。周囲に田や畑がある鄙びた田園の風景を思い浮かべると、「柿灯る家」の描写が絶妙に感じられてくる。(以下略)